

## 「演奏会で詠んだ俳句」

市川市文化振興財団 副理事長 能村研三

私の音楽歴と言ってもずぶの素人なので、人に話せるようなものは何も持っていないが、音楽を聴くことは学生の頃から好きだった。中学一年の時の担任の先生が音楽の先生で音楽の時間以外にも鑑賞室でクラシックのレコードを聴かせてくれた。私も鑑賞ノートなるものをつけることにして、曲名、作曲家名、演奏者と指揮者の名前を記入し、あとはその曲を聴いた時の自分なりの感想を書き加えた。演奏家のよし悪しなど勿論専門的なことには言及できないので、その曲の心に浮かぶイメージを書き綴った。レコードを買う余裕もなかったのも、もっぱらFM放送やテレビのクラシック放送を聴くことが多く、テレビでは公開録画のコンサート無料招待があり、せっせと往復はがきで応募していた。昔の日本フィルの渡辺暁夫や読売日響の演奏会で、東京文化会館や渋谷公会堂等での演奏会が多かった。市川では、母親が古くから市川交響楽団の維持会員であったので、村上正治先生の指揮によるコンサートを和洋女子大の昔の講堂で聴いたことも覚えている。

社会人になってからも、一年に何回かは東京のクラシックの演奏会には出向くようにしていたが、昭和60年に市川市文化会館で開館してからは、今まで東京でしか聴いたことがなかった演奏会が地元で気軽に聞けるようになったことは夢のようなことであった。

平成15年より、その文化会館の館長を3年間務めさせていただいた。その時、私が最も力を注いだのが、多くの人に気軽にクラシックのコンサート聴いていただけるように仕掛けを考えることであった。それまで毎年行われているNHK交響楽団の演奏会、一流の指揮者やソリストが来る割には、公演の人氣はいま一つであった。

N響の演奏会は毎年の恒例事業であったが、シャルル・デュトワ指揮の時ですら、聴衆数は大ホールの半分にも満たず、アンコールにも応じてくれなかった、といったN響公演そのものへの疑問符、不満がふつふつとしていたこともあった。

そこで、音楽プロデューサーの小坂さんと東京の泉岳寺近くのN響の本部に出向き、幹部役員の方々と膝を詰めて話すこと

が出来、市川ではNHKホールや地方都市で行う定期公演用プログラムではなく、市川独自のものをぜひ、とお願いした。

それ以来市川に相応しいオリジナリティのある演奏会を企画することが出来るようになった。一人でも多くの方々に聞いていただこうと、私自身もちらしを持って市内の学校やお店などを駆けずり回って宣伝をした。その効果があったのか、ほぼ満席状態になるほどチケットは売れた。演奏会の前半はよく知られた名曲でリズム遊びを入れて聴衆参加型とし、後半をドヴォルザークの「新世界」にした。2005年3月27日（日）本番の日、開場を待って長蛇の列ができた。チケットは確かに売れていたが、当日になるまでその実感はなかなかわかなかかったが、努力が実ったようで今では館長時代の良き思い出となっている。

その時に作ったのがこの一句。

## リラ冷や劇場囲む列につく

演奏会に入場していただく前に大ホールの入口に並んでいたが、この日はその列が文化会館を取り囲むように外まで続き、私たちスタッフを喜ばせてくれた。さらにこの日に作った句は、

## 調弦を了へて惜春の大ホール 人声に似たるチェロの音春深し

いよいよ、オーケストラの団員達がステージに登場。そして下手よりコンサートマスターが現れ、調弦が始まる。調弦はチューニングとも言うって、演奏が始まる直前の「音合わせ」で、オーボエがまず「ラ」の音（A音＝標準音）を鳴らし、それに合わせて次々と各楽器が「ラ」の音を響かせて、オーケストラ全体の音を合わせていく。これも徐々に収束し静寂をむかえ、指揮者の登場を会場一体となって待つ。観客にとってはオーケストラを聞く期待に満ちた楽しい瞬間でもあった。